

聖書：ピリピ 3：4～9

説教題：キリストを知るすばらしさ

日時：2017年3月5日（朝拝）

ピリピ人への手紙は「喜びの手紙」と呼ばれています。3章に入って1節でも「最後に、私の兄弟たち。主にあって喜びなさい。」と述べられました。パウロはこの「喜び」について語るにあたり、2節で「犬に気をつけて」と言いました。前回述べたことを詳しく繰り返しません、2節で言われていたのはユダヤ主義者たちのことでした。彼らの主張は使徒の働き 15章1節に示されています。「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」というものです。パウロは異邦人たちに、ただイエス・キリストを信じる信仰によって救われると教えました、ユダヤ主義者たちはそれを否定していました。彼らは信じるだけでは不十分であって、割礼を受けなければならない。ユダヤ人に帰化しなければならない。そして律法や様々な儀式を守らなければならないと教えていました。パウロはそういう彼らのことを3節で「人間的なものを頼みにしている」あり方だと言いました。「人間的なもの」という言葉には印がついていて、欄外を見ると直訳では「肉を」とあります。すなわち肉を頼みにするということです。これは何もユダヤ主義者にだけ当てはまる話ではないと思います。私たちの前にあるのも、この二つのあり方のどちらかでしょう。すなわち人間的なものを頼みにするのか、それとキリスト・イエスを誇るのか。ともすると私たちも肉を誇り、肉を頼みとしやすい者です。たして自分はどうかであるのか、今日のパウロの証しの言葉を通して検討させられたいと思います。

まずパウロは「私は人間的なものにおいても頼むところがあります」と言います。パウロもかつては肉に頼む者でした。いやこの時のユダヤ主義者たち以上にそうでした。ここでパウロはかつて自分がより頼んでいた7つのことを上げています。これらは前半の四つと後半の三つに分けることができます。まず前半は彼が生まれながらにして持っていた特権です。1つ目は「八日目の割礼を受け」。ユダヤ主義者たちが割礼を誇っていたことを受けて、パウロはその割礼について言うなら私は8日目だと述べます。2つ目は「イスラエル民族に属し」。パウロは異邦人からの改宗者ではありません。3つ目に「ベニヤミンの分かれの者です」。このようにはっきりとどの部族出身かを示すことができます。そして4つ目に「きつすいのヘブル人で」。ここは原文では「ヘブル人からのヘブル人」という表現になっています。パウロはタルソで生まれた人でしたから、外国

育ちのヘレニストであり、当時のギリシャ・ヘレニズム文化にかぶれた人だと見られる可能性もあったのでしょう。しかしパウロは親もユダヤ人で、ユダヤ人としての誇りを持つ家系で育てられました。そして使徒の働き 22 章から分かりますようにエルサレムで育てられ、ガマリエルのもとで教育を受けました。そういう意味でヘブル人からのヘブル人、きつすいのヘブル人と言うことができました。

後半の三つは生まれた後のことの事柄です。5 つ目は「律法についてはパリサイ人」。パリサイ人は当時、律法を大事にする最も宗教熱心な人々としてユダヤ人の間で尊敬されていました。パウロはそのパリサイ派に属していました。6 つ目は「その熱心は教会を迫害したほどで」。ユダヤ教はキリスト教を危険な新興宗教と見て迫害しました。パウロはそのために特別に熱心に活動しました。そして7 つ目は「律法による義についてならば非難されるどころのない者です。」これは当時の人々の律法理解から見て何ら非難されないものだったということです。ユダヤ人の基準からすれば、完全な生き方をしていた。後ろ指を指されることは一つもなかった。

パウロはこうして、これらについて言えば私はユダヤ主義者たち以上であると言っています。もし「私は素晴らしい」という名のコンテストを開いたら、パウロは彼らのはるか上に行く人、優勝するような人でした。ガラテヤ書 1 章 14 節でもパウロはかつての自分についてこう語っています。「私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。」

ところがそのパウロに大転換が生まれました。7 節でパウロは「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私は損と思うようになった」と言っています。「得」というのは、自分にとってのプラスということです。やがて神の前で評価されること、誉められること、自分の救いにとって得となること、これを持っているから自分は大丈夫と安心できること、自分のよりどころ、自分の誇り。しかしそれらを今は「損」と思うようになったと言います。ただ価値がないというだけでなく、マイナスということです。自分にとっての害、ダメージでさえある。どうしてそのような価値観の転換が起こったのでしょうか。それは「キリストのゆえに」と言われています。

これは何と言ってもあの有名なパウロのダマスコ途上の回心を指すものでしょう。使徒の働き 9 章にそのことが記されています。パウロはその出来事を使徒の働き 22 章と

26章でも証していますから、使徒の働きには合計3回もその時の体験が記されていることとなります。パウロはその時、キリストの弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、国外まで彼らを追跡していました。その道の者であれば男でも女でも見つけ次第縛りあげて、エルサレムに引いて来るためでした。しかしダマスコの近くまで来た時、彼は復活の主に出会います。天からの光が彼を照らし、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声が彼にありました。彼はそのままゆい光の中で栄光に輝くキリストご自身に会います。木に吊るされて呪われて死んだはずのイエスが神の栄光の内に現れている姿を目の当たりにした。その瞬間、彼は地面に倒れ伏し、目が見えなくなりました。そして手を引かれてダマスコの町に入り、三日間、食事もとらず、暗やみの中にいたのです。

彼はイエス・キリストの本当の姿を見た時、すべての価値観が変わりました。その時、それまで自分が誇って来たすべてものが一気に色あせたものに見えるという経験をしました。それらは何とつまらないものか、価値のないガラクタ同然のものが分かった。8節の「ちりあくた」と訳されている言葉は、口語訳聖書では「ふん土」と訳されています。これは「ごみ」とか、「食べ物の残りくず」とか、「排泄物」などを指す言葉です。考へに入れるべきは、パウロはそれまで人一倍厳しく自分と格闘して来た人であっただろうということです。誰からも何一つ非難されないように懸命な努力を重ねて来た。いのちがけの戦いを通して数々の栄冠を手にして来た。それらが全部「無」とであると分かった時の彼の衝撃を私たちは理解できるでしょうか。積み上げて来たすべてものがその時、轟音を立てて崩れたのです。とてつもないショックな出来事だったでしょう。

そのように彼の価値観を変えたもの、それは8節にあるように「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさ」でした。口語訳聖書はここを「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに」と訳しています。新共同訳聖書は「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに」と訳しています。誰でも偉大な人格を持つ人に触れると圧倒されるような思いを持つものです。強烈な印象を受け、感動し、大きな励ましを受けます。色々な師との出会いを経験した人もそうかも知れません。しかしパウロはここでキリストご自身に出会いました。神なる人格を持つ方です。その方が何と人となって、あの十字架にかかってくださったのだということがパウロには分かって来た。聖なる栄光の神がそこまでご自身をかがめて仕えてくださった。そしてそれはこのような罪深く、神に反逆して歩んでいた者たちのためであっ

た。こんな者たちを地獄の滅びから救い出すために。そして十字架と復活のみわざを通して、この者たちを天国の栄光のいのちへと導いてくださるために。このキリストの素晴らしさが分かり始めた時、パウロはこれまで誇って来たことの一切が取るに足りないものに思われたのです。もちろんこれはキリスト以外のことは全部価値がないということではありません。その他のもの全部を否定的に見るということではありません。ただそれらは誇るには値しない。キリストとは比較にならない。比較するならただのゴミにしか過ぎないということです。

パウロは「私はそれらのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています」と言います。そのように彼が考える目的が8節後半以降に語られています。まず言われているのは「キリストを得るため」ということです。パウロはすでにキリストを知ったのではないのでしょうか。その意味でキリストを得たのではなかったのでしょうか。しかしここにキリストを知ることの深さが示されています。一度キリストと出会い、キリストを知ったら、それですべてが終わりではないのです。キリストへの回心はキリストにある富の発見のほんの始まりにしか過ぎません。パウロはその奥の奥を知りたい。このキリストを私は得たい。この方の満ち満ちた豊かさを十分に知る者になりたいと言っているのです。これは最終的にはキリストの再臨の日に実現するものです。

これと並んで9節の頭には「キリストの中にある者と認められ」とあります。前の節で「私はキリストを得たい」と語られましたが、パウロがただキリストを捕まえるのではない。パウロがキリストを求めるのですが、そこで分かることは彼がキリストの中にあるということです。彼がキリストの中に捕らえられ、キリストと結ばれ、キリストと一体にさせられているという恵みの中にある。そういう状態にあることが、同じく最後の日にはっきり認められる者でありたいということです。

そしてこのこととの関係でパウロが9節で述べている祝福は義認の祝福です。キリストが下さる第一の祝福として聖書の至る所で述べられている祝福です。私たち人間の大きな問題として聖書が述べていることは、私たちが神との正しい関係にないということです。だから本当に祝福された生活を送ってはいない。人間的な仕方での世的な祝福を手に入れることができても、神からの祝福には生きていない。先にパウロが積み上げて来た様々な業績、あるいは人間の前の義は、キリストの光の前ではガラクタ同然であること、ふん土やごみに等しいと言われました。イザヤ書 64 章 6 節には「私たちの

義はみな、不潔な着物のようです」とも言われています。いくら私たちの間で素晴らしいと思われるものでも、神の前では不潔な着物に等しい。それは神の前では全く役に立たない。私たちを救うものにはならない。しかしキリストは私たちのために完全な義を用意してくださいました。キリストは人としてこの世に誕生して、律法に全くかなった生涯を歩まれました。その100点満点の義が、信仰を通して、この方により頼む者に無償でプレゼントされるのです。自分の義により頼むことをやめ、神のあわれみに感謝し、へりくだって受け取ることによって、それはその人のものになると聖書は語っています。この義を頂いて、私たちは今ここにある時から、神との正しい関係に歩み始めることができるのです。そしてやがての日に確かにキリストの中にある者だと神から最終的に認められ、永遠の祝福に入る者とされるのです。そういう意味で肉を頼みとし、キリスト以外のものにより頼ませようとするものは、その人にとって害なのです。それは真の祝福から私たちの目をそらせ、大変なマイナス効果を私たちにもたらす危険なものだからです。

果たして私たちは何を求めて日々歩んでいるのでしょうか。何を自分の土台として歩んでいるのでしょうか。私たちはやがての日にガラクタ同然であることが判明するもののために一生懸命、今の自分のエネルギーを費やして生きているということはないでしょうか。パウロはキリスト・イエスを知っていることのすばらしさゆえに、と言いました。キリスト・イエスを知る知識の絶大の価値。あるいはキリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさと。パウロはエペソ書3章18～19節でもこう言っています。「すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように」。キリストの愛を知ること、人知を超えることを知ることです。それは圧倒的なお方を知ることです。これにまさって私たちが追い求めるべきものは他にありません。これにまさって私たちが深く満たす喜びはありません。そのための道は信仰の道です。ユダヤ主義者のように肉を誇るのではなく、キリストに信頼する道です。もし今朝、自分がユダヤ主義者のように人間的な何かを誇っていることに気がつくなら、私たちはそれを今日の御言葉に従って、キリストを知ることには比べたらゴミだと考えたいと思います。それはやがてちりあくたであることが判明するものだと知りたいと思います。そしてキリストに信頼することに向かいたい。あるいはもし自分を振り返って自分には誇るようなものは何もなく、ゴミのようなものしか持っていないと思う人がいるなら、その人はもっと良い位置にいます。その人はキリストに信頼すればいい。キリストにより頼む人は「完

全な義」を恵みによっていただくことができます。そして神との正しい関係に歩むことができます。そしてさらにその先の祝福もあるということが次の 10～11 節で語られます。私たちが一切のものを捨てて、このキリストこそを求める歩みに進みたいと思います。すべてものを凌駕し、永遠にまで至る、キリストを知る絶大な祝福と喜びの中にその歩みを導かれて行きたいと思います。